

「左大将」と表記されているのであるにすぎないのであろう。著者は今もこの方法を守っておられるのであろうか。

清輔家の歌合について二、三触れておられるが、第一冊九二頁辺でいっておられるように、師光家百首が先行し、後に歌合が催されたという推定は慧眼の如くであると思うが、一九〇頁で、歌合の廿八番の判は左右両方が勝となっている、というように言っておられるのは、これは新校群書類従に依られたからである。著者は大体この版に依られており、勿論この版の長所は私も認めるが、反面大きな短所があり、その一つに誤植の多い事があげられる。この部分は群書類従刊行会版では右のみに判がある（因みにいうと書陵部本では判がない。また十四番は類従本無判であるが、書陵部本では左勝）。

しかしながらこういう性格を持つ書に、いつも御教示をうけている青二才の私ごとき者が書評の筆を執るなどという事は至難の業であらう。本書が俊恵や長明を研究するに当たって必読座右の書たる事は論を俟たない。各研究者が、その研究のさなかに、一つの問題にぶつかって本書をひもといた時に、著者の説に問題を感ずる事があろう。それを解明し、克服してゆく事が著者の学恩に報いる途であつて、目くじらたてて吹毛の難を放つ事は失礼以外の何ものでもあるまい。

平安末期和歌史の研究は最近とみに深化している。その結果、本書の説が少しずつ補訂されて行く事はあるかもしれないが、その研究深化に果す本書の役割は絶大なものであろう。また発心集についても著者は『鴨長明の新研究』に続き、第二冊で諸説話集

との関係を提示して、慎重な作業を進め、一々について推定を示されているのであるが、全体に関する性急な結論は下しておられない。この謙虚さ・慎重さにはただ頭が下がるばかりであるが、恐らく結論は将来を期しておられるのであろう。その成果がやがて第三冊・第四冊……となって刊される日を鶴首しているのは私ばかりではあるまい。

（立教大学講師）

第一冊 碧冲洞叢書第三十一輯 三十八年二月二十五日発行

第二冊 碧冲洞叢書第三十二輯 同年五月二十日発行

愛知県大府町横根梶田三六 築瀬方 非売品

## 高田瑞穂著 『反自然主義文学』

稲垣達郎

近代日本における「反自然主義文学」ないし「非自然主義文学」についての論考が、耽美派と「白樺」派を中心にまとめられている。

高田氏には、この範囲にぞくする対象を論じた文章が、ここにまとめられているもの以外にも、かなりたくさんある。木下奎太郎や志賀直哉などについては、別に単行本もあることは周知のとおりだ。そういう状況のなかで、本書は、比較的ちかごろの執筆にかかるもので組織されている。ということは、四六判で三〇〇

頁に満たない外形でありながら、じつは、これまでの大きな背景と興行のもとになりたっていることを意味するのでもある。ここでは、そういう背景と興行のもとに、まえにいった種類の文学に新たな見透しと概括がおこなわれているわけなのだ。この本に、充実感なり重量感なりがあるのは、さしあたった批評精神の高さによるのは無論だが、ひとつには、そういう背景や興行とも関係している。この場合また、批評精神の高さ自身が、そういう背景や興行と深く関係していることも、ことわるまでもなからう。

いまいったことと、またおのずから関係しているのだが、この本を通じて強く感じられるのは、作品のよみがきわめて深いことだ。どの論も、作品の深いよみのうえに立っている。作家論も、思潮論も、流派論も、作品の深いよみと無関係にすぐれたものとはなり得ないことは、あらためていうまでもない。あらためていうまでもないだけに、じつは生命的なのだ。もともと、個々の作品がどれほど深くよめても、すぐれた作家論も思潮論も流派論もなりたないことはあり得る。けれども、そこを飛び越えた文学論は、けっきょくは、独合点以上のものにはならない。少くともわたくしは信用しない。文学論における作品論の位相については考えるべきものがあるが、いまはふれない。ただ、よみの不在が、しばしば平然と存在していることを考え合わせれば足りる。この本を貫く基本的条件としてのよみが、それだけめざましいわけだ。このことは、『暗夜行路』考』一篇のなかにもみてとれ、谷川徹三、小林秀雄、河上徹太郎、中野重治以下のもろもろの『暗夜行路』論とはまた別の意味を主張し得るものと考えられる

が、それは今ふれないとして、そうした独立した作品論ではなく、さりげなく語られている短評のうちにさえ、その根の深さが端的にあらわれていることを言いたいのだ。いたるところにみえるが、たとえば、鷗外の『キタ・セクスアリス』である。佐藤春夫は、『哲学小説』という風に一種みごとにとらえはしたが、そのつきつめたところまでを、必ずしも具体的に指摘しているわけではない。そこを、この本のひとつくぐりだりで、「人間の自然と現実を全面的に肯定しようとする自然派に向かって、人間とは克服すべきものであり、絶えず自己を克服する精神こそ人間であるという自己の立場を対置する。そこに鷗外の理想主義があった。と同時に、この作によって鷗外の願うところは、自然主義の道を行くことによつてはもはや下降の一途をなごるしかない人間性を、いま一度高貴なものに回復しなければならぬということであった」と書いている。これほど簡潔に、この作品の意味を要約したものを、わたくしは知らない。作品論が作家論へまで密着のまま昇華している一例である。よみの深さなくして、こういう概括は不可能である。

この本を通じて、もうひとつ強く感じられるのは、さまざまな文学現象（作家・作品・思潮そのほか）についての意味の洞察である。これは、もとより右にふれたこととどこかで重なり合う性質のものだが、現象相互の意味の論理化、論理の展開的確味、そこからする文学史上の見透しについての周到さ、そういうものが、いずれも、いまいった「意味の洞察」につながっている。

耽美派といえ、自然主義文学の自然観なり人間観なりに満足

しなかった、明治末期から大正へかけての反自然主義文学のうちの唯美主義的傾向のものに、いちおう中心がおかれるわけだが、この部分だけをとりあげるだけでは、ほんとうは、その正体と意味をたしかめることはむずかしいかもしれない。この本では、そのところろが、おそらくははじめて、文学史の長い流れのなかから洞察され、つかみ出されている。問題の核心をさぐるために、一八八〇年代のいわゆる文学革命期あたりまでさかのぼり、文学の理想像からする諸種の「偏向」を指摘しながら、見透しとしては、戦後の武田泰淳あたりまでを結ぶ線をひき、この派の文学の現実や必然性、その文学史上の意味を考えている。その途上において、いくつもの「美意識ないし美的感覚の裏がえしの試み」、「美的世界におけるいっさいの価値の改価の企て」が追求され、そのプラス・マイナスがあきらかにされている。

耽美派の追求・評価が、この本の大きな柱であるが、もうひとつの柱は、おなじく反自然主義文学でありながら、耽美派とは別の意味を生んだ「白樺」派の追求・評価である。漱石との文学上の血縁の吟味にはじまり（この部分、とりわけ興味ぶかい）、「白樺」の諸特質をさぐるべく論評している。さきにふれた『暗夜行路』の論も、この一連のうちにふくまれているわけだ。

この本には、ほかに、文学研究、とりわけ作家研究についての方法論上の問題が検討されている部分がふくまれている。これは、著者の研究上の態度なり立場なりが理論的におのずからあきらかにされているものであり、右の二本の柱にみえる批評的実践と表裏一体をなしている。わたくし自身をもふくめるいわゆる国

文学者の徒の批評精神の甘さについて余すところがない。文学研究者といわれるものが、この鏡にむかって己の顔をおり写してみるべき性質のものだ。

どうにも意を尽せない。書かでものことばかりをつらねてしまったようだ。総じていえば、ちかごろ世に問われた日本の近代文学論（あるいは研究）のうちで、とりわけ感深く読み、出色のものと思った。きびしい気分の中に、文学上の香気がただよっていることでは、研究書として稀有の印象である。歯切れのいい、格調のある文体とも関係していると思う。

明治書院刊・定価六〇〇円

（早稲田大学教授）

## 窪田般弥著 『日本の象徴詩人』

石 丸 久

あえて比較文学というわけではないが、この国の近代文学が欧米のものの考え方や感じ方の影響をうけていることはいうまでもないのだから、明治・大正・昭和の文学を論ずるには、彼を知り我を識らねばならぬことはもはや常識である。この研究方法が最も活潑に、かつ的確になさればならぬ分野は、とりわけ、詩歌のジャンルであろう。

明治以降の詩を論じ詩人を説いて、いわゆる文学史的に筋の通ったものや鑑賞の面ですぐれたものは、従来必ずしも少ないとはいわれない。作に対する印象批評や人に対する追憶のたぐいまた